

新選百物語卷三

○立ツリトガ因果の始

列女傳小云陰徳あるとのハ陽言に報ふとされ
ば善惡をすくらぬへまこと忽ち報す牛掌と
すと義れ乃ハ善とすらものへすよく徳
の立ツル悪をかどりのへ聲てゆゑがほし人
て情ひさへ愁ぞう今へひう西園の育
園に可憐とす年の年來併勢衆文のひう
て同園の人毎年春宮のとに行をけり
あれりとひとけきと育人代半うれ
人道中の苦勞をいといて聞かせうへば、情
つれよひととは却く思へてある年の春不
サム立同道人もなくたゞ一人をそぞ同者も
てまごなる牛不定されば門跡を失ふや
と数年來たゞそ一食三百疋膾牛一石故
つて一言一で實の外ぞと旅もて行くあり
じくも立夜の邊ふくらん人をあくつひせんと
すすむ折りとぞ是をすゆんで枝を力の
邊づきよと立良の邊とくらくをかの別限と
約わればまご夜へひうせの木並車を三重と

持りとも家へ廻るをやむに おれにて御人と
立あがつそろひくと歩けり 一すよ大和の國乃
われより燈籠の傍六とて近國名にての零者
うり殺生経ざと博奕を業ト さてくとくとく
に寝とありして相ざる歎うづ被育人と行
ちづば可憐人をさむかと立うてうきまめ
私ハ侯勢參とされより京都へ生すの神祇の
とされば石も山もなせぬもの南都へもむか
筋そぞく巻へられと頼みは侍下くとく
因道もあき夜うづ北道中盲人又似倉ぬま

抱持あずく姿そもに抱くぬ在處是と
さひふの縄もひゆきを危ひの如く三年小の京
あともぬとく候んどう道モトサヘは海忍小
ハ盜賊多一かきばれん一かきばれん教さ
せきて候そつ事半町もつゝ色紺一ヶ傳六通
ぬみひひにまきハシ思ひて立と腰を廻は山へ
入まくとてひかくもるゝみ育田のまぢり
衣をまと眼を折り 信小人をす たけわす
うぬりのぞと紙まの天すへもうて歟 て育人
をくらまのとむいとば懐へふをす 入きば育

人やうき行ひのやれを旅人をもとへ駄狼^{駄狼}
のサムヤモトを多里^{多里}とからを駆るの令
儀^儀とくにしたくなとまこと下^下ものくわくをもくら
いや東^東の横雲^{横雲}まるびと旅人の往來^{往來}往々
ば夕^夕うくれてへる半^半と痛^痛りあつだんむ
きの脇腹^{脇腹}は突^突らへウ^ウをうひのうみれども
おにすげてこまごまをせせきひ金ぬもまん
そく盲人^{盲人}をひだらすうよく寒^寒とも殺^殺と
逃^逃つけ思^思ひゆうとべーと罵^罵をほせらまくみ
食^食様^様とがされがふ途^途こくやいとくとされ
みその援^援もうもよそく嘘^嘘のくうと加^加傍^傍一傳^傳
さく極^極懲^懲ゆく死^死穢^穢のう入^入へ見向^{見向}をせどこれ
えのれがくゑゆく博^博奕^奕にゆくと奪^奪まく一^一手^手
くうり^{うり}計^計せ^せあつたる半^半と博^博奕^奕りくら
負^負あく^{あく}算^算念^念やと思^思ふ折^折う^う男^男子^子卦^卦人^人玉^玉けふ
が六月^{六月}此^此もつと傷^傷を^をかの^{かの}二^二人^人不^不幸^幸
うるそれよしゆゑ^{ゆゑ}困窮^{困窮}一^一けを^を何^何とぞあ
場^場を遁^遁まんと^と廻^廻く^く思^思事^事とめぐらし因^因付^付
よ方^方治^治とく^{とく}罹^罹病^病のよあくろ^{くろ}眼^眼病^病いがく
て耕^耕作^作もゆきゆきて^て稼^稼磨^磨と業^業と^と業^業

に宿泊の半すれば家費ふらをあくほん
くと銀すと貯へ諸人より傍つす利便をもと安乐
み世とよりれど傳六屹し多きつてに難き此中
かれどそのものこれも歎をやと或夜はひひそ
移園あれど一かへりを以てと食ふ哉あゆみ
を夫婦の者とも當不を乞食食とあらむ
かくよ敵の内豈か一送舟の朱月浪花とも相違
マモレドと後さるべりとけとバカ始終を
せとけ鬼もあざむく強氣の傳六ふまとてかがれ
りよくさんと今まと武威もりよつてかがれ

切と遠ゆるふとぞ石川のふと裁て唯今の中
重恩を却へて下りて厭まざ追従ひらり
歟りへて博奕併聞當方にはまき一ヶ一月
あまたたきのまゝ身筋へらひも盡そく
詠方とひてて一日書いとくわからしと思案の
言ひ乍ら治ひまう毎日催促返答にあぐあぐ
ぬけつてもうつのをやうが才治色へりへり
て脇を空せて居催促傳六としも駆びて機
いうての手摺の面合をせぬ世間を今一才治
ゆきのんあらぬ刻もよじ催促され傳六



越みさうしたやどよりの詞乃腰く
金の半そと零ひ一に今り詞れぐくには借方其金
儀ことまことへ度てをもゆる外の人す
はせひど因の肆ひ正直の姿をもと見て寛
じや外でよそぞろひゆく零ひのいひを書
れども意極と義理もて貸する金は浅文と
きをもすれば御くらべあつやくと見て詞
をやくげすく食は様くとくとくうち當
古いかとと志のりの素人をもひとへつと遣
あやうりあつゆかんめんと場はほくと不論れ

おとすと云ばくつを煙筒うひ候あくまうと
肩をもつてつきあせを方法へ尤程なくさ
猶玉扇色ハ朝色也と骨髄よ徹一腹ひと
どもよきすとあく後と筋もと肩くとくと
解り一が事多く身を擱思ふに生甲斐かき
今育れ始終も零はまつうかす立と被ふかく
て酒をそのへ持とひあげあく行傳六よ第面
し先やくらの事心てよりあい膳を立と酒
を今後の後悔さそへまづう酒をく機知ふ
すい事うまこと万半トハゆうて下されとぞア

のまば傳ふ憂ふ事つやせのやれ
飛鳥もさへう
どれせり石く茶器はうす歩二三盃酒のまづう
加減を足食をかゝ持ち小猿折財の下とぐと
名ばウトのうけふをきうれば同のうふきの手くま
あとぬくらとゆみ假に腰折とうふせ
とまが吃えをゆきゆく脇脚より死にけりが傳六
ハ源子の病のうきゆひ甚故に五のものたまを
あつまうもぬく小害生せ一ぐあ日傳六傳人本
むくこれぞ全く営業のつまもくてば苦痛
行をゆく元今年九月廿日切殺一傳六

の金ふと遅ひ甚四時の夜ぐ來く火宿よかれ
と夜とう盲人の姿わく穴あきととくとく我と
責その痛魚ぐ一ゆふ嘸そきよ夢ひがく
雪半ともあくとくすにゆく痛やとくと
夜晝もゆど七日が間苦痛一て湯水も無くとく
一に傳六がまく云をま一書もせ一を直り
寫せ一まゆ

○女の念力爰中れ高名

うじく幼うど射ふ其矢もあから巖は魚ち
しを孝の一念みに親を思ひ天の通ひども

彼を見られを嘆く事で毛根力みと思ひやう
がれめやと極に毛根を引か歎きとひやう
翼まで新子のそれと戸の曲音とすりうけ
折うるは在るうこゝるをひ石が多矣に甚
どサアサカウタタタタタタタタタタタ
タタタタ誰そやうと待てあらむのけ来る
サたを着てまくもちひが空くタタタタ
ぬきんくすに基産のらと捲き作付を起
て毛根と運を失ひばくみのうく捲ひの毛
根をもとをうち消されかのれづくゆ行

書に著すと仰うされば玄廟妻婦ハ往ひて室内
之人をつぶす事的はまこと而て仰うど今日其
えより多大の心事あるゆゑやと仰ひておぼる
幸四郎もお經堂の下りて坐すれやせ
の門先で又久金ハモガちう御家へ一通姿ハ見
やうと返着度て玄順夫婦それ故ゆき家
儀上ツヘ身残リ方々弱れども人情ともぞ
宿泊初夜トニモちゆう仰藍蝶に身にぬれど九
事焉ぐく隣にナテ諸々方々弱れども人情ともぞ
あれどと息づぎ一と告ぐれば夫婦ハ大

新選百物譜三

至く玄極す半と照翁也どより法事へ由る方
角もくつてお仕へとま帰うち速モアゆき
法事に第面一今納うるの始終の様子ナシハ言
語れば法事うゆき梅花心易學中指南八卦
大金トモナリナシ傍てあらぐく考へよし計に
手と手て一大半ト玄的老人今日ハ縁念の卦
にあれア火性の生れ火克金の牛羊されバ歛引小
火立づくいき落葉ぐハ水部すやえかの卦
政中邊の卦又やれバ水克火の懊もあつ四つ卦
すておそれハ二命れやと是未幸時辰戌の

おまへはか隠くあへきやうへ 死體を廻の事
と用ひ身姿をすれども轟にてておもむか
まほ二人の親の人間も死をあげてさき
つき泣とさけべとす申斐れまことあそゆ云
頗る高に擧て葬送し 野毛の煙とす
夕が女えろの解すぬ母親の喰事とせど
一間の待ちにりあらむかよとくす 泣わ
せられ敵をみてひと罵で怒り正身あはせ
玄門の子孫くに譲くこれぞ少あれましが四
久日すまで夜半ま内室の大いに壁屋



山中行脚
山中行脚
山中行脚
山中行脚



ありばく観音文庫至せうて要すもとひかわる
と幸にうちまう拠うちをひよ寄く駿駒子
玄門も着き免てちのぐれれ想歎ゆ傍に度也
ひづくとりもしかふともあらねく暮る
有底ぬきぬ障みに机つてあくまくやとす
うと男バ様ヌテアリめむ對毛れも與と
多く譲をすれどとゆくすはまとハ今日が
そりか起てえんと紙燭に火をつけ傍シ
よ定教をみだりく是へにて吻より社を遠
一筋み血まみれなきば紙の家並譲のうる
とくいへう痛つやといゆく一病を尽れと
舌ふそが柔ゆうればどくうと不審れ不
れ内室へ着て男のあまうひくひくを
宿あまうく眠ふ着ヌ伽藍の東ノ邊ヌ詔の
狛が居て歩くかと生てへ立傳ドと立りて
て狛に抱つき組づき寝びつきらく狛も命
みがたとえを逃んくとりとさーと折りと
ハ持あへだ狛の吐に咽つ手を含まう殺して
くまやく男の石を蹴られ一け血のつて
ナク西夏東の邊を見立と譲れば玄倉唐

ゆうゆどまく血のほき一そ不思儀されん邊と
キテ急き程されば年ろふ古狐吹をくられ
て死へるやうと女の念力岩をも無と毫
を失ても甚姦との邊方の移をおされませ

○紫雲あるに密夫の玉象
小長ねうど書かづくの御座貴しべ一貞女とを
萬女とも古今に秀一 稲葉若末世もぞもそのあ
を議せうひふ賢女を商せん不勝とひ禮ぬと
ひ白てつひ土とひあ禮清西朝の歴物にて
重ひべ一人をうて重に導の羅人ナリヤハ

あらたりのとば崩ともすとその所以そ因ひ合は
牛のとねんで人あへあらずゆきひてあがゆ
うひと宣うひぬみへ親のゆきひみのあい
假令ふも不義淫亂のとひつど如ふハ面もや
考とあ一やてほへと教へ一 芝居の御娘
さぬのわちやもぎてお寄られ後かへ傾城やへ
臺れゆのいや私文のとひ名ハ勿傷少もと
毒をうけ母親のねどて娘よそ難けよて一
齋な散のわゆ中く幼きとみゆとひてま
ごのの廣くの黒き瞬とあく四番のみ



山家集



の家をもち崩し逃げの狂歌をうへり
みへ審査の種とぬりのせりむりす
の國は福村や善助とて異服高臺をもる人あつて
お閣とて娘をもちらうと只知りけ娘と云諸人
にまわる容色されば父母の寵愛をすくあらば因
含育とみんも勝と一年めうち大きひ京大
坂又度後をかゝ乳母婢を多くつ帝藍地下で
え堂上まとうどよと名よろ師とく和歌を
学せ象の湯を女一翁てゆ利休流の人
たの長板までもあてまへ岩へぬる岸とく

秋の志すはすれどもと申すにがく
アて病氣とよきをあくば只候もとく而癒て
氣ひつゝげ小妻へく物せりとき手をされば
ゑ親男始輦ふへん轡を医者へも見を苦よ
藏と驕さたち諸神供佛へ立教さり奉
御寶本め肝經をくびの毛と毛経にじ世
の縁つて舍者定離とはかうきくあれど
あゝ豈の病と済ゆ花すうを知りしれ様久
て隱の様と見ゆるゝ一柳や野毛よ運り
候うお園が姿あらぐと新井ぐにう思

ねとひとんびと草前のみくらみどり
えぬく傍よ立ちてうきよと重まれた
雪零れどく坐すにもそれな水の如何ゆ
風ありそぞとおれよ逐年色をどほにひま
斗を模すも青れ紙ば詮きく可もやまみ
清セヨミラ張りて遠く一ひとと庵くの御
室とすり絶後どうふ吊へとも而も邊をと深安
すば根の草筋の名敷北中クと万葉集にも根
焉でうと穢とおへ送れども根を姿へ老庵
とぞうねかうね方解されば一门中御をくわ

まよておぞめに石井寺へサアアのまく佛事と
きをともすとこちうれしき所へなぐく山の
僻處不遙得妙儀のちうくあでんけ妖怪へ退く所
トと甚しう諸國又名高ミ禪僧太元和尚に近
き語れば和尚もぞくひぐく後をまつす
を見とけ迷ひとぞし得まへと夜もくらべ
た一人長島よりあれりにそれば一家の頭よちが
わと二者の下に處れども草首のまくわ室で
間をもあすと算引とみだ候をやひまし有
て和尚路経をよくぞく七君の旅と考るア

まよの旅のあゆのへをと替へけ間の人そぞひ隊か
をぬてこそ切へゝまよの半身もとと一人も舊事
會へば遙年もとと見をゆえと甚方へ亡失せざ
れ向ひアシカ寝の居たるゝ立あづく草首の中
へくにとあくとく顧れも始むひくをそぞり
半身草首の下さゝづれが不義の玉委數十
部をもとと對へひくとと道を迷ひの様きよ
と幽靈にすひづひんやく威儀とびしよた
燒をもとと人間かと思とゆべと約束ひて抱きの言葉
亡者れどもとへうまくりふ合掌すとぞくあらが

別日か雲のとくあがまく瀬でからひすりて
和尚の船移をうなぎ一門のとくどゆる。亡者を
そぞり集うまくねきと後を吊ふべと多めに被
ゆくども佛前こそ焼とう煙の中にまくくと亡
者へ再び姿をあつた大悟如懶の引取て則
て今佛果を得たりと紫雲に立ててあれ
やとたえ和尚の字考せぬがうぞとすらすよ

新選百物語卷三終